

# かいじん二十めんそう

江戸川乱歩

青空文庫



あるおひるすぎのことです。

東京のまつなみ小学校のこうていで、みんながあそんでいました。

休み時間なので、一年生から六年生まで、かけまわったり、キヤッチボールをしたり、きかいたいそうをしたりして、あそんでいたのです。

「あつ、ヘリコプターだっ」

だれかがさげびました。

「ほんとだ。ヘリコプターだ」

口々にさげびながら、みんな空を見上げました。

よくはれたまっさおな空に、ヘリコプターが小さくうかんでいました。高くとんでいるので、のっている人のすがたは見えませんでした。

「あつ、びらだよ。びらをまいたよ」

また、さげび声がわきあがりました。

おお、ごらんなさい。ヘリコプターから、さあつと、こなのようなものがふき出したかと思うと、それが、きらきらとかがやきながら、ゆつくりおちてくるのです。

おちるにつれて、こなのようなものが、すこしずつ大きくなり、

それが、空いちめんひろがってきました。

「きれいだねえ。金色に光っているよ」

ほんとうに、そのひとつびとつが、金色に光っていました。

紙のびらではありません。なんだかへんなものです。

「あらっ、あれ、おめんだわ。金色のおめんよ」

女の子がさげびました。

そうです。それは、おもちゃやでうっている、セルロイドのおめんのようなかたちをしていました。

何百という金色のおめんが、空からふってくるのです。ちかちか、きらきらそのうつくしいこと。子どもたちは、こんなうつくしいけしきを見たことはありませんでした。

しばらくすると、そのたくさんのおめんが、こうていのあちこちにおちてきました。

みんなは、「わあっ」と、その方へかけ出し、あらそって、金色のおめんをひろいました。

その日、学校がおわると、おなじほうがくへかえる子ども七人が、一かたまりになって歩いていました。

みんな、金色のおめんをかぶっています。あのととき、おめんは、百いじょうもこうていへおちたのです。みんなが、おめんをもつていても、ふしぎはありません。

それは、セルロイドを金色にぬったおめんでした。

金色にぴかぴか光ったかおが、にやりとわらっているのです。

くちびるのりようはしが、きゅつと上へ上がった、三日月みかづきがたの口です。

「きみたち、そのおめんは、なんだか知ってるかね」

とつぜん、うしろで、声がしました。ふりむくと、せびろをきたおとなの人が、やっぱり、金色のおめんをかぶって立っているのです。

「あつ、すぎ山やま先生だよ」

だれかがいいました。うけもちの先生ではないので、よくわかりませんが、なんとなく、すぎ山先生にいています。

「このおめんは、なんだか知っているかね」

すぎ山先生らしい人は、またたずねました。

「知りません。どうして、こんなものをまいたのでしょうか」

五年生の石村いしむらたかしくんがいました。

「おうごんかめんだよ」

「えっ、おうごんかめんって……」

「きみたちは知らないかね。金色のかおをしたおうごんかめんと  
いう大どろぼうだよ」

「あつ、あのおうごんかめん。でも、なぜ、こんなおめんをばら  
まくのでしょう」

「それは、おうごんかめんが、このへんにあらわれるぞという前  
ぶれだよ。あいつは、そんなことをするのが大すきだからね」

すぎ山先生らしい人は、そういつて、おかしそうにわらいまし

た。

「この中に、石村たかしくんはいるかね」

「はい、います。ぼくです」

「それから、きみのいもうとのミチ子ちゃんこは」

「ええ、いるわ。あたし、ミチ子よ」

ミチ子ちゃんは、二年生のかわいい子でした。

「そのふたりに、ちよつとようじがあるんだよ。さあ、こつちへおいで」

すぎ山先生らしい人は、ふたりの手をとつて、よこ町ちようにまがり  
ました。

そこは、むかしからあるおみやで、ふかい森にかこまれた、ひ

るでも、うすぐらいところです。たかしくんとミチ子ちゃんは、  
なんだか、きみがわるくなつてきました。

大きな木の立ちならんだうすぐらいところへ来ると、とつぜん、  
すぎ山先生のすがたが見えなくなつてしまいました。

ふたりの手をはなして、大きな木のむこうがわへ行つたかと思  
うと、そのまま、きえてしまったのです。

きょうだいは、あちこちと、さがしまわりましたが、どこにも、  
先生のすがたはありません。

しかたがないから、かえろうとすると、「えへへへ……」と  
いう、きみのわるいわらい声がして、大きな木のみきのうしろか  
ら、からだじゅう金色にかがやくかいぶつが、すがたをあらわし

ました。

あつ、おうごんかめんです。

すぎ山先生が、いつの間にか、おうごんかめんまのすがたにかわつて、ふたりの前にあらわれたのです。

## 2

石村たかしくんと、いもうとで二年生のミチ子ちゃんは、すぎ山先生だと思っていた人に、古いおみやの森の中につれこまれました。

ところがそのひとは、おそろしいおうごんかめんだったので。

おうごんかめんこそ、人々からこわがられていたかいじん二十めんそうなのです。

「わっははは。どうだ、おれがなにものかわかっただろうな。いや、なにも、こわがることはない。きみたちならんぼうなことはない。ただ、きみたちのおとうさんのもっている、りっぱなえがほしいのだ。あしたの夜、ちようだいに上がると、おとうさんによくいつておくのだよ。わかったね」

そういつたかと思うと、二十めんそうは、ぱつと森の中からかけ出していきました。

そして、すこしたつと、とおくから、じどうしゃの走り出す音がきこえました。きつと、おみやの外にじどうしゃをまたせてお

いたのでしよう。

たかしくんとミチ子ちゃんは、いそいで家にかえり、おとうさんにこのことを話しました。

石村くんのおとうさんは、えがすきで、りっぱなえをたくさんあつめていました。

二十めんそうは、それをぬすみに来るといのです。

石村さんは、すぐ、名<sup>めい</sup>たんていのあけち先生にでんわをかけました。けれども、あけちたんていはるすで、少年名たんていの小<sup>こ</sup>林<sup>ぼやし</sup>くんがやって来ることになりました。

小林くんは、少年たんていだんのだんちようです。

だんいん六人と、それからけいしちようの中<sup>なかむら</sup>村<sup>むら</sup>けいぶに話を

して、けいじ六人をつれ、あくる日のひるごろ、石村さんの家  
やって来ました。

六人のけいじと、六人の少年たちは、手分けをして、へやの  
口や、まわりのにわで見はりばんをしました。

ひる間はなにごともなく、夜になりました。

小林くんは、へやの入口のろうかのいすにかけて、がんばつて  
います。

へやの外のくらいにわには、けいじたちがまどとへいの間を行  
ったり来たりしていました。

みんな、手にまるいぼうのようなものをもって、いそぎ足で歩  
いています。

つぎの日の朝になると、石村さんが、小林くんのところへやつて来ました。

「あつ、石村さん、なにごともありますでした。へやをしらべてください。二十めんそうは、ぼくたちをおそれて、とうとうぬすみ出せなかつたのです」

小林くんがそうだったので、石村さんはへやの中をしらべましたが、えは一つもなくなっています。

そこで小林くんたちはかえっていききました。

みんなのかえってしまったあとで、石村さんのところへおかしなでんわがかかってきました。

「きみは石村さんかね。ははは、とうとうだまされたね」

「えっ、なんだって。きみはいつたいたれだ」

石村さんは、びつくりしてききかえました。

「はっははは、わかりませんか。こんなでんわをかけるのは、あいつにきまつているじゃありませんか」

「えっ、あいつだって。それじゃ、きみは二十めんそうだな」

「そうだよ、おきのどくさま。きみのたいせつにしているえは、みんなちようだいしたよ」

「えっ、ちようだいしたって。わたしのへやのえは、一つもなくなっていないよ。ははは」

「ははは、きみの目もあてにならないね。あれは、みんなにせものだよ。」

小林もにせもの。少年だんいんやけいじもにせもの。みんな、おれの子分こぶんだったのだ。

夜中に、本もののえをはずして、にせものとはめかえて、本もののほうをもち出してしまったのさ」

「えっ、あれがみんなにせものだって」

石村さんは、びっくりして、へやへとんでいって、ひとつびとつよくしらべました。

「あっ、やっぱりそうだ。本ものとそっくりにかいてあるが、みんなにせものだ」

石村さんは、まっさおになつていいました。

それにしても、小林くんまでにせものとは、いったいどんなや

り方かたをしたのでしようね。

## 3

二十めんそうは、石村さんのえを、ぜんぶにせものとりかえて、ぬすんでいってしまいました。

そこにいた六人のけいじと、小林くと少年たんでいだんいん六人がまもっていたのですが、それが、みんな、二十めんそうの子分のへんそうしたにせものだったのです。

ほんとうにおどろきました。

どろぼうたちにばんをさせたのですから、ぬすまれるのはあた

りまえです。

小林くんまでにせものだったのです。

では、本ものの小林くんは、どうしたのでしょうか。小林くんは、二十めんそうのために、ひどいめにあっていたのです。

石村さんは、この話のはじめに、小林くんにでんわをかけたましたね。

そのでんわを、石村さんの家にしのびこんでいた、二十めんそうの子分がきいてしまったのです。

小林くんは、石村さんからでんわがあると、くわしい話をきくために、じどうしゃをよびました。

小林くんが、じどうしゃにのろうとしたとき、うしろから、ひ

とりの男がのつてきました。

その男は、小林くんをたおして、さるぐつわをはめ、手足をしばつてしまいました。

この男とうんてん手は、二十めんそうの子分だったので。こうして、小林くんは、つれていかれたのでした。

そして、じどうしやがとまったところは、はらっぱの中の、おかしな家の前でした。

そこは、おばけやしきの見せもの小<sup>ご</sup>やです。

その中には、きみのわるいゆうれいや、おもしろいおばけや、いろいろなものばかりがならんでいるのです。

手足をしばられた小林くんは、ふたりのわるものにだきかかえ

られて、おばけやしきのおくの方へつれこまれました。

竹やぶの中のほそい道をすすんでいきました。

すると、とつぜん、すごいかいぶつがあらわれました。

大きさは、二メートルもあり、くびが、じめんからにゆうと出ているのです。

それは、ゴリラのようでもあり、ライオンのようでもあり、人間のわるもののようにでもありました。

それは、大きな、おそろしいかおでした。

ふたりのわるものは、ぼうぼうと、草のはえたじめんに、小林くんをほうり出しました。

すると、竹やぶの中から、おうごんかめんをつけた二十めんそ

うが、ぬうつとあらわれました。

「わっははははは……、小林か、しばらくだつたなあ。きみをこうしておいて、石村のえを、ぜんぶちようだいすることにしたよ」

小林くんは、くやしいけれども、しばらくしているので、なにもできません。

「今ごろは、きみとそつくりな少年と、少年たんでいだんいんが六人、けいじが六人、石村の家をまもっているわけだ。

それがみんなにせもので、おれの子分というわけだ。

わっはははは。

二十めんそうのちえは、こんなもんだ。

あけちが東京にいないのが、ざんねんだよ」

といたしました。

「おれは、あけちのにせものだって、ちやんと作るからね。

ところで、きみは、すこし、このかいぶつの中で、おとなしくしているんだ。

このおばけやしきは、じつはおれのものなのでね。

めずらしいものがたくさんあるよ。きみにも、あとで見せてやるよ。はっはははは」

ああ、大どろぼうが、おばけやしきをもっているなんて。

かいぶつのうしろにまわると、ちよつと見たのではわからない入口がついていました。ふたりの子分は、それをあけ、中に小林くんをほうりこんでしまいました。

これから、ポケット小<sup>こ</sup>ぞうが小林くんを見つけるのです。

そして、二十めんそうとのおそろしいたたかいはじまるので  
す。

## 4

小ばやしくんが、おばけやしきのかいぶつのくびの中にとじこ  
められたのと、おなじ日のことです。

しようねんたんでいだんいんのポケット小ぞうは、なんにもし  
らないで、おばけやしきのちかくをあるいていました。

すると、むこうからだんいんの<sup>うえ</sup>の上くんがやってきました。

「あつ、ポケット小ぞうじやあないか」

「あつ、いの上さん。なんで、そんなにいそいでいるの」

「うん、たいへんなことがあるんだ。さつきむこうで、ビーディーバッジをひろったんだ。うらを見ると、ローマジで小ばやしとほつてある。だんちようのバッジにちがいない。それが、三メートルおきぐらいに、いくつもおちているんだ」

「じゃあ、小ばやしさんが、だれかにさらわれたんだね」

「うん、ぼくが、このバッジのあとをつけていくと、おばけやしきのみせもの小やのまえにでたんだ。小ばやしだんちようは、あのおばけやしきにつれこまれたにちがいない。」

それで、いそいであけち先生のところへしらせようとおもって、

でんわをさがしていたんだよ」

「だめだよ。あけち先生は、おお大きなほうへ行って、るすだよ」

「それじゃ、しかたがない。このちかくにいるだんいんの木下きのしたくんをよんで、三人でおぼけやしきにはいつてみよう。小ばやしだんちようをさがすんだ」

ふたりは、ちかくのおみせの赤でんわで、木下くんをよびました。

木下くんは、すぐにやってきました。

「木下くんは、でんわのあるだんいん五、六人にでんわをして、あとから、おぼけやしきへきてくれたまえ。」

だが、中へはいらないで、どこかにかくれているんだ。

そして、もし、中からふえのおとがきこえたら、ぼくたちをたすけにくるんだ。いいかい」

いの上くとポケット小ぞうは、木下くんをのこして、おばけやしきの中へはいりました。

まだ、じこくがはやいので、けんぶつの人あまりいません。うすぐらいおばけやしきは、しんとして、おはかのようにしずかです。

こわごわあるいていくと、せびろをきてぼうしをかぶった、六つぐらいの子どもがとびだしてきたのです。

「いらつしやい。こちらへおいでください」

なんだか、レコードでもきいているようなこえでした。

その子どもは、はぐるまのようなおとをさせて、先にあるいていくのです。

「この子どもは、きつと、ロボットだよ」

いの上くんは、そういつて子どものかおをゆびでたたいてみました。すると、コツコツとおとがしました。

ロボットなのです。

そのロボットについていくと、まっくろなまくでかこまれたへやにはいました。

「あつ、がいこつだ」

ふわつと、一つのがいこつがあらわれて、コツコツと、ほねのおとをさせながらおどりだしました。

すると、また、もう一つもう一つと、つぎつぎにがいこつがあらわれて五つにふえてしまいました。

そして、いの上くとポケット小ぞうのまわりを、ぐるぐるとおどりながらまわるのでした。

それは、ほんとうのがいこつではありません。つくったものなのです。でも、まつくらなところで、こんなものであったら、だれだって、きみがわるくなります。

さあ、これからどんなことがおこるでしょうか。

ふたりは、うまく小ばやしくんをたすけることができるでしょうか。

## 5

おばけやしきへつれこまれた小ばやしくんをたすけるためにポ  
ケット小ぞうといの上くんが、おばけやしきへはいつていきまし  
た。

そとには、しょうねんたんていだんいんが、あいずのあるのを  
まっているのです。

小さな、子どものロボットが、ふたりを、がいこつのへやへつ  
れていきました。

がいこつが、カタカタおどっているのです。

はじめはびっくりしましたが、そのがいこつは、あやつりにん

ぎようと同じだとわかったので、ふたりは、わらっておくへすすんでいきました。

子どものロボットは、もう、ついてきません。

たけやぶのうすぐらいみちをとおつていくと、すうつと、ふたりのあたまの上に、おぼけがとびついてきました。

それも、にんぎようだとわかったので、こわくありません。

おくへすすんでいくと、いろいろなおぼけがでてきましたが、ふたりは、へいきです。どんどんすすんでいくと、大きなかいぶつのかげがたけやぶの中から、にゆうつとあらわれました。

大きさは、二メートルもある、ゴリラとライオンをまぜあわせたような、大きなおぼけです。

ふたりが、おもわずたちどまってみると、そのくびが、カ  
タカタとうごいているのにきがつきました。

「おや、へんだな。もしかしたら、この中に……」

そうおもったときです。

「わっははは」というわらいごえがして、たけやぶの中から、ぴ  
かぴかと金いろにひかるものがあらわれました。おうごんかめん  
です。

「きさまたち、おれが、ビーディーバッジをみちにばらまいてお  
いたのにだまされて、やってきたな。まっていたぞ。

さあ、いいものをみせてやる。こつちへくるんだ」

二十めんそうのおうごんかめんは、そういったかとおもうと、

いの上くんにとびかかってだきかかえてしまいました。

そして、ポケットト小ぞうをつかまえようとしたが、小ぞうは、すばやくたけやぶの中へにげました。

二十めんそうは、てした手下をよんで、いの上くんをわたすと、ポケットト小ぞうをおいかけました。

たけやぶをさがしましたが、なかなかみつかりません。

ポケットト小ぞうは、りすのようにすばしっこいのです。

二十めんそうは、まごまごとあるきまわっていました。

ひよつとみると……。

むこうに、小さなやつがたっているのに、きがつきました。

そばへいってみると、それは、子どものロボットでした。

「いらっしやい。こちらへおいでください」

ロボットは、それしかいえないのです。二十めんそうは、ちえつとしたうちして、いつてしまいました。

すると、ロボットがにやつとわらったのです。

それは、ポケット小ぞうがばけていたのです。

二十めんそうがいつてしまったので、ポケット小ぞうは、かいぶつのくびのところへいそぎました。うしろへまわつてみると、ドアがあり、ひらいてみると、手足をしばられた小ばやしくんが、中にたおれています。

ポケット小ぞうは、小ばやしくんのなわをといて、ふたりで、たけやぶのおくへにげました。

すると、そこには、ひろいろうかのようなところがあつて、まどがついていました。

ポケット小ぞうは、まどをひらいて、あいずのふえをふこうとしました。

そとにいるだんいんにしらせるためです。

小ばやしくんは、いそいでそれをとめました。

「ぼくたちだけではあぶない。ぼくがそとへでて、中むらけいぶにでんわをかけてくる。それまで、きみはかくれていたまえ」

そういつて、小ばやしくんは、そとへとびだしていきました。

さあ、二十めんぞうは、つかまるでしょうか。

## 6

小ばやしくんは、けいさつのたすけをたのむために、おばけやしきをぬけだしていきました。あとにのこったポケット小ぞうは、ロボットにばけたまま、また、たけやぶの中へもどり、二十めんそうをさがしました。

「あつ、いる、いる」

おうごんかめんにはけた二十めんそうが、おばけやしきのおくへあるいていくのがみえます。

ポケット小ぞうは、そつとあとをつけました。しばらくすると、みちはいきどまりになりました。

まわりが、コンクリートのかべでかこまれているのです。

二十めんそうは、そのいきどまりのみちにはいったかとおもうと、ぱっときえてしまいました。

にんじゆつをつかつたのでしょうか。

いや、そんなはずはありません。

ポケット小ぞうは、そこにはいつて、中のかべをしらべました。そして、かべをあっちこっちなでまわしていると、コンクリートの上に、ぽつんとでっぱつたところがあり、それがぐらぐらうごくのです。

ためしに、ぐつとおしてみました。

すると、目のまえのゆかがさつとひらいて、四かくなあながで

てきたではありませんか。

ちかしつへのいり口です。

二十めんそうは、ここからおりていってしまったので、きえたようにみえたのです。ポケット小ぞうは、あなの中へおりようとなりましたが、ふときがついて、ビーデーバッジをみちにばらまきました。そして、あなのふたをひらいたまま、ちかしつへおりていきました。

かいだんをおりると、ドアがあります。

そつとひらいて、中をのぞきました。

「あつ」

おばけです。うじやうじや、おばけがならんでいるのです。一

つ目小ぞう・三つ目小ぞう、一本足の大にゆうどうや、そのほか、たくさんのおぼけやおぼけでいっぱいです。

おどろきました、よくみると、みんなにんぎょうです。

おぼけのあいだから、へやのおくをみると、大きな木はこのまえに、二十めんそうがたっていました。

木のはこをあけて、中から、ほそながくまいたえをだして、みています。

「あつ、わかった。」

あれは、石むらさんのいえからぬすみだした、だいじなえだつ  
えは、みんなまいて、あのはこの中にしまつてあるのにちがいない。

ポケット小ぞうは、それをみつけたうれしさに、ゆだんをして、へやの中へはいろいろとしましたので、おばけがガタンとたおれました。

大いそぎでにげだしましたが、二十めんそうはきがついて、おいかけてきました。

そして、かいだんのとちゅうでつかまってしまいました。

ポケット小ぞうは、その手をはらいのけて、ちかしつへにげこみ、おばけのにんぎようをかたっぱしからたおして、おかしなおにごっこをはじめました。

でも、とてもかかないません。二十めんそうのために、とうとうおさえつけられてしまいました。

「きさま、ポケット小ぞうだな。こうしてやる」

二十めんそうのてつのようなゆびが、くびにぐいぐいとくいこ  
んできます。

いきがつまって、いまにもしにそうです。

そのときです、ビーディーバツジのききめがあらわれました。

小ばやしくと、五人のだんいんと、五人のおまわりさんが、と  
びこんできたのです。さすがの二十めんそうも、こんなにおおぜ  
いにとりかこまれては、もう、どうすることもできません。

とうとう、手じようをはめられてしまいました。

それから、おばけやしきにいた手下も、みんなつかまってしま  
い、石むらさんのだいじなえも、ぶじにもどりました。

「ポケットくん、こんども、きみのおてがらだったね」  
小ばやしくんが、ポケット小ぞうをほめました。

## 青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第21巻 ふしぎな人」光文社文庫、光  
文社

2005（平成17）年3月20日初版1刷発行

底本の親本：「たのしい二年生」講談社

1959（昭和34）年10月～1960（昭和35）年3月

初出：「たのしい二年生」講談社

1959（昭和34）年10月～1960（昭和35）年3月

※底本は、連載の回数を見出しとしています。

入力：sogo

校正：北川松生

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# かいじん二十めんそう

## 江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>